
とある噂の取捨選択

junq

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある噂の取捨選択

【コード】

N3940S

【作者名】

junq

【あらすじ】

学園都市の都市伝説。

この話は、その中の一つを追うものである。

学園都市の超能力者。

この話は、その中の一人を追うものである。

とある都市伝説の接触不能（前書き）

非常に残念ですが、この小説の更新はかなり遅いことでしょう。何故なら、徹頭徹尾暇つぶしで書いている小説だからです。検索しても目ぼしい小説が無かったりする時に書いてました。

……だが、そんな暇は恐らくもうない（泣

とある都市伝説の接触不能

学園都市

周りより、二十年も三十年も技術が進んでいると言われる場所。科学的に開発された超能力が存在するその場所には、特有の噂話がある。

曰く、有り得ないはずの複数の能力を使う者。

曰く、ありとあらゆる能力を無効化する者。

曰く、公共の場にも関わらず衣服を脱ぐ者。

学園都市の都市伝説。

このお話は、その一ページを参照するものである。

曰く、見えていても決して触ることが出来ない者。

その名は『^{ゴースト}接触不能』

「つまり儚げな幽霊っ子ってことやねー！」

「ここまでポジティブだといっそ清々しいにゃー！」

コンビニで立ち読みしながら騒ぐ、迷惑な二人の友人を見ながら、上条当麻は溜め息を吐いた。

ぼうつと外に視線を向けると、妙に青白い男？が入ってくる場所だった。

何故『？』が付いたのかと言えば、妙に艶のある黒の短髪を見たからでもあり、腰やら足やらが妙に細かったからでもある。

更に言えば、顔つきも男性的かといえばそうとも言えるが、どちらかというと中性的だ。

化粧でもして女性だと言い張れば、十人中七人は納得するんじゃないだろうか。

服装は黒のシャツに、黒のズボンと見事に黒尽くめ。

そのせいで、細い体が更に細く見える。

ガーと扉が開く音に紛れて、その人はこれまた黒い財布のようなものを落とした。

ここで話は変わるのだが、上条当麻という人間は基本的に善人である。

落ちた財布なんて見れば、ネコババよりも先に届けることが頭に浮かぶ。

「おーい。アンタ財布落としたぞ」

よって、声をかけても気付かない様子で歩いていくその人物を、上条当麻は引き止めた。

具体的には、肩に『右手』をかけることで。
胡乱な目付きで右手を一しきり眺めた後、その人物はようやく振り返った。

「……ふむ。はじめまして『イマジンブレイカー幻想殺し』」

ざわりと上条当麻の毛が総毛立つ。
目の前の相手の言葉に、理解が及ばない。

「な、んで、その名前を」

「ふむ？ そう驚くことではないが……ふむ。あえて言うなら私に触れることは難しいから、だな」

感情が浮かばないままの顔で、そう告げたその人物は、上条当麻の背後を見て首肯した。
呆然として、未だに言葉を発することが出来ない上条当麻を放つて。

「ふむ。財布を落としていたか。礼を言わねばならまい」

そう言ったかと思うと、その人物は文字通り上条当麻の左半身をすり抜けて行った。

それこそ幽霊のように存在感無く、されど視界には移っているその姿。

「まさか……『接触不能』？」

未だに、上条当麻の二人の友人はあーだこーだと騒いでいる。
今、上条当麻の目の前で起こった不可思議を目撃した者は少ない。
目の前の黒尽くめのその人物は、財布を拾い上げてから、僥げに笑
って答えた。

「正式名称は知られていないのだな……ふむ。私は『セレクトティブ取捨選択』と
いうのだよ」

学園都市。

周りより、二十年も三十年も技術が進んでいると言われる場所。
科学的に開発された超能力の中でも、特に秀でた者達がいる。

方向を操る者

未知の物質を生み出す者。

強力な電気を操る者。

波であり粒子でもある電子を操る者。

精神を操る者

よく分からない何かを扱う者。

学園都市の超能力者^{レベル5}

このお話は、その内の一人を追うものである。

触れるものを選ぶ者。

その名は『セレクトタイプ取捨選択』

ざあざあと雨が降る。

その中を、沢山の学生が傘をさして歩いている中、傘をさしていないのに全く濡れていない者がいる。

その彼は、決して雨には濡れず、他の人間とぶつかっても、その体をすり抜けながら歩いていく。

体をすり抜けられた人間は、何かの能力であろうことを理解していても、驚く。

どういう能力を駆使しているのか……はたまたあれは唯の立体映像なのか。

上から下まで黒い彼は、人間なのかどうなのかを疑われながらも、その通りを歩いていた。

「……ふむ。スキルアウトか」

そんな彼の目に、一人の女学生が路地裏奥から、更に奥に、連れ込まれていく光景が飛び込んできた。
選択肢は多岐に渡る　無能力者なら通報だけして逃げる、なんて手を取ることもある。

「ふむ。確か風紀委員の支部が近くにあったな」
ジャッジメント

アンチスキル
警備員よりも早いだろうという判断か、彼は風紀委員に電話で場所と状況のみを告げた。
電話を受けた風紀委員は詳しい情報を聞こうとしたが、それより彼が電話を切る方が早かった。
携帯をポケットに押し込み、彼はふらりと路地裏に侵入する。

「ふむ。やはり『力』とはこういう時に使うべきだな」

ゆらりゆらりと体を揺らしながら、それでいて素早く、彼は路地裏を踏破していく。

通報によって知らされた路地裏に、すぐさま駆けつけてきた者がいる。

レベル4
大能力の空間移動能力者。
レポート

風紀委員活動第177支部所属。

常盤台の制服を身に纏い、その茶髪をツインテールにしている彼女の名前は白井黒子。

「これは……どういことですか……？」

そこには、三人の男達が地面に転がされており、被害者であるだろう女生徒は気絶している。
そして、その中央には、上から下まで黒尽くめの男が立っていた。
その男は黒子の方を一瞥したかと思うと、黒子とは逆の方向にゆらりゆらりと歩いていく。

「っ！ 待ちなさい！ 風紀委員ですの。事情を聞かせて頂きます！」

黒子は大声を張り上げるのだが、どうにも男は黒子に取り合ってもりが無いようで、振り返ることさえしない。
額に青筋を浮かべた黒子は、その男の前に立ちふさがる形で空間移動。

「風紀委員ですの！ 事情を……」

しかし、彼は止まらない。

黒子との距離をどんどんと無造作に詰めていく。

3メートル…… 1メートル…… 50センチ…… 20センチ。
そこまで距離を詰められた所で、黒子は『戦闘の意思あり』とみなし、男の頭上に空間移動。
その男の脳天を、思い切り蹴飛ばした…… ハズだった。

「……………え？」

足が頭にめり込んだ…… その光景を見て、黒子は自分の蹴りにそこまでの威力があったのかと。
この人を殺してしまったのではないのかと、一瞬狼狽した。

しかし、彼は至って無傷。

黒子のドロップキックが命中した素振りも見せず、ゆらりゆらり。その姿を見て呆気に取られた黒子は、そのまま地面に墜落した。

流石に受身は取ったが。

「一体……何者ですの……？」

ゆらりと路地裏から消えていった彼の背中を、黒子は地面に手をつきながら見上げていた。

とある都市伝説の接触不能（後書き）

設定集？ あるけどない。

そんなもんは、作者のPCにだけ入ってればいい。

とある風紀委員の能力考察（前書き）

忙しい中推敲完了おおおお！

よし、課題ぢらないよ。

とある風紀委員の能力考察

実に面倒臭そうに、『取捨選択』と呼ばれる彼は携帯の画面を見ていた。

風紀委員活動177支部の人間が彼について調べている、という情報があるところには表示されていた。

「……………ふむ。先日的事件で目を付けられたか」

他に仕事は無いのか、と呟いて彼は携帯をポケットに押し込んだ。

取捨選択の携帯には、彼が独自に構築したプログラムが入っている。彼自身のことについて調べる端末を自動的に検索するプログラム。そして、自宅のパソコンなどに自動的にバックアップを残すプログラム。

主なものはこの二つだ。

前者については、なるべく自身についての情報を制御する為。

後者については、携帯を使い捨てる為である。

学園都市から豊富な奨学金を受け取る彼にとって、携帯電話は消耗品ではない。

……………もともと彼の携帯はどちらかというスマートフォンだから、『携帯電話』という区切りに入るのかは疑問だ。

上から下まで黒尽くめの彼は、眠そうな顔を更に歪めて大きな欠伸をした。

そう、まるで今も日常を過ごしているかのようだ。

「それで、死ぬ準備は出来たのかよ超能力者^{レベル5}」

「……ふむ。そうか。囲まれていたのだったな」

のんびりとした彼の声を聞いて、彼を取り囲むスキルアウトの面々が殺気立つ。

全員が拳銃などの飛び道具ではなく、鉄パイプや木刀を持っているのは、恐らく同士討ちを防ぐ狙いだろう。

彼は8人しか居ない超能力者^{レベル5}の一人、ということでは有名だが、もう一つの異名でも有名だ。

『ゴースト
接触不能』

有名な都市伝説から辿れば、さほどの労力をかけること無く、超能力者《レベル5》の一人だと分かる。

超能力者を倒して名前に箔を付けたいと思う輩は意外と多い。

そして、彼は遠距離攻撃をしない。全くと言って良いほど。

その一点で、彼は無能力者にとって、倒しやすいと思われている。

そういう輩を適度に誘き寄せ、潰す。

それが、彼のライフワークだ。

「こっこの、野郎！」

一人が血気に逸って飛び掛ると同時に、全員が輪の中心に殺到する。ほぼ同時に振り下ろされた凶器の群れに、突破出来るような隙間は無い。

だが、それがどうした？

ガン！と鈍い音を立て、凶器が次々に地面に激突する。

それを向けられた本人は、至って自然体。

逆に、振り下ろした側は、決して自然体では居られない。

やっと理解したのだ。何をどう小細工しても、その刃は届かないと。

全ての凶器は抵抗無く、それでいて彼の体に傷一つ作らずにすり抜けて、地面に激突していた。

中心に立つこの場の絶対者は静かに喋り始める。

「ふむ。私の二つの異名の意味を理解していなかったようだ。まあ、今更だが」

次の瞬間、狭まって狭まって、もはや密集していた輪が、一欠片も残さず吹き飛んだ。

中心の彼は、まるで今誰かを殴り飛ばしたような格好で静止している。

それもそのはず、彼は今殴り飛ばしたのだ。周りに居たスキルアウト全員を。

「てめえ……能力、一体何なんだよ……」

「能力使わずに……拳で、だと……」

スキルアウト達が呻き出すが、立ち上がる者は一人も居ない。

先の彼の攻撃は、無力化を重視したものだったからだ。

そう、ただ単純なる心臓殴打。ハートブレイクショット

「ふむ。別に能力を使わなかった訳ではないのだが」

むう、と唸りながら彼は腕を組み、考えを巡らせた。

どう説明するのが、一番分かり安いだろうか？

それを数秒の間考えて、彼が出した結論は

「ふむ。面倒だ。帰るか」

『説明しろよっ！？』

スキルアウトの面々の声が重なった。

まあ、勝者が敗者の言うことを聞く道理も無く、彼はいつも通りゆらりゆらりと路地裏から出て行った。

能力によって傷つけられないことを最優先とした、継ぎ目無く、金属光沢を放つ壁。

個人の部屋以外の空間ではAIMジャマーなどの対能力者用の設備により、能力の行使は困難。

全五基あるエレベーターは縦×横の二次元的な動きで、乗っている者を直接部屋まで運ぶ。

それ故に、個人がどこに住んでいるか、全てを把握しているのは管理人のみ。

そんなVIP用のマンションに、『取捨選択』と呼ばれる彼は入っていく。

普通の学生ならば雰囲気だけで気圧されそうな、大理石や金で飾り付けられた玄関をゆらりゆらりと歩いていく。

そして、エレベーター脇に設置された各種認証装置に、いつものことであるかのように無造作に手を伸ばす。

エレベーターに入ると、そこには電卓のように数字が並べてあるだけで、例えば『1F』などのボタンは存在しない。

そのボタンを、やはり彼はいつものようにポチポチと押していく。

最後に、彼が一枚のカードを数字盤の横のスリットに通すと、ようやくエレベーターは動き始めた。

やがて、エレベーターが止まり、部屋の入り口に当たるドアが現れる。

彼はドアのノブに当たる部分に取り付けられた機械のスリットに、カードを通す。

機械のランプが赤から緑に変わったことを確認し、彼はドアを開いた。

「お帰りなさいませ。」主じ

そして、即座に閉めた。

ピー、という音と共に、機械のランプが再び赤に変わる。

彼は少し体を仰け反らせて、部屋を間違えていないか確認。

……そして、先程とは違って目に気たるさを見せながら動作を繰り返し、ドアを再び開いた。

「……先程のは、どういづつもりだ？ 雀」

「メイドを雇っている実感が沸くんじゃないかなー、と。ふと思っただですよ」

そう、うそぶくのは、茶髪を肩のところであげた少女。

その釣り上がった糸目は、何故か優しい印象を与える。

そして、その頭にはメイドカチューシャ！

そして、その体にはメイド服！

その姿を、ある人が見たならこう言うだろう。

まさにメイド。

そんな少女……雲雀雀くもすずすずを目の前にして、取捨選択の返答は簡潔だ。

「ふむ。脳に蛆でも湧いたか」

「いきなり酷いのですよ、と」

そう言いながら、雀はスカートを翻す。

足音を立てず、スルスルと奥へ歩いていく。

その後ろを追うように、取捨選択も奥へ向かう。

やがて二人は、一つの部屋の前で止まった。

「モンスターのグラフィック全54体。終わったことを報告します、と」

「ふむ……ダンジョンプロジェクト迷宮計画の完成の日は近いな」

雀がセキュリティ用の認証機器にパスワードを打ち込む。

ピーという電子音と共に、ゆっくり扉が開いた。

その部屋にあるのは、ただひたすらに並列接続されたコンピュータ郡。

その演算速度は、外の世界のスーパーコンピュータの約3倍。

彼の所有物の中で、一番高価なものがこれだ。

そのコンピュータ郡の前に置かれたいくつかのスクリーンのうち、一つの前に彼は座り込んだ。

軽快にキーボードを叩き、彼は一番近くにあった棒状の記録媒体にデータを保存する。

そして、おもむろにその記録媒体に指を突きこんだ。

そんなことをすれば、普通データは壊れるはずだが、画面上のそのデータは次々に更新されていく。
あたかも、今もデータの改変が行われているかのように。

「相も変わらず、理解出来ない操作ですね、と」

「……まあ、自覚はしている」

彼らが製作しているのは、いわゆるダンジョン運営ゲーム。
プレイヤーは、神の視点からモンスターに命令を下し、ダンジョンを作らせる、というもの。

彼らの作るゲームの特徴は、それこそ何をしても良いということ。

ダンジョンを閉鎖し、中で延々とダンジョン作りをしても良い。

深奥に美しい宝石を配置し、誘き寄せられる冒険者をなぶり殺しても良い。

ダンジョン・コア

迷宮核をさらけ出し、侵入者と緊張感ある勝負をしても良い。

18歳以上なら、冒険者達を性行為に浸らせることさえ、出来る。

もつとも最後はきつちりと年齢制限がかかっているが。

「ふむふむ。やはり、仕様をあらかじめ決めておくと、楽で良い」

「前は締め切りがあったから、最後はデスマーチでしたね、と」

前、というのは、ありきたりのRPGゲームの製作を依頼された時

のことだ。

本来、RPGというのは、ストーリーからグラフィックから味方から敵から……とにかく凄まじい量のデータを用意する必要がある。そんなゲームをたった二人で？ 普通ならさじを投げたくなる。結局、この二人も、最終的にはデスマーチと呼ばれる連続徹夜の製作で、なんとか乗り切ったのだ。

比べて、今回のゲームはどうだろうか。

ストーリー？ 元々無い。

味方？ 既にデータは完成済み。

敵？ 自動生成である。

更に言うならば、有料で販売はするものの、趣味で作っている為に、締め切りすら無い。

なんて素晴らしい響きだろうか。

「既に、夕食の準備は完了していることを報告します、と」

「ふむ。ご苦労。あと十分でリビングに向かう」

「かしこまりました、と」

足跡を立てず、スルスルと雀は部屋を出てゆく。

残されたのは、作業を続ける取捨選択。

「……ふむ。どの程度のスペックのパソコンに合わせれば良いか…

…」

取捨選択は悩む。

このコンピュータは、ハッキング防止の為に、ネットに繋いでいないのだ。

パソコンの標準規格さえ、部屋の外に出なければ分からない。

「……ふむ。そうだな。3つほど、別のモードを作るか」

具体的には、低スペックパソコン用とか。

ハードにパソコンを選ぶと、どうしてもそこら辺が厄介なのである。一つのパソコンを大量生産するようなことが、需要を考えると出来ない。

それに、ゲームハードのように、ゲームを動かすことを考えた性能にすると、どうしても値段が高くなる。

あちらを立てれば、こちらが立たずなのである。

といっても、逆にパソコンさえあれば、辛うじてだろうと動かすことが出来る為に、市場が大きいというのはメリットだが。

専用のハードが無ければ、全く動かないような一般的なビデオゲームには無いメリットだ。

「……もうすぐ、十分か。ふむ。行くか」

記録媒体から指を引き抜き、そしてデータの確認。

作業を終えた取捨選択は、リビングで待つ雀の元に、ゆらりゆらり

と歩いていく。

「うーん。白井さんが遭遇した人というのは……恐らく、この人で
すよ」

「接触不能？……初春。私は都市伝説を調べている訳ではなくて
よ」

風紀委員活動第177支部。

その中で、二人の少女が調べものをしていて、
頭に花の冠を乗せた格好の、初春飾利。
茶髪をツインテールに纏めている、白井黒子。

「上から下まで黒尽くめの、中性的な男性。ドロップキックがすり
抜けた……でしたよね？」

「ええ。その通りですの。女生徒が事情を把握していなかった以上、
あの方から聞くしか……」

「だから、それは全て接触不能の特徴なんですよ。更に深く調べた
ところ……超能力者の第三位らしいです」

「っ、つまり、お姉さまより上……？」

第四位。超電磁砲^{レールガン}の御坂美琴。

電気を操るといふ、単純明快な能力の持ち主にして、学園都市の頂点である超能力者^{レベル5}

努力でその位置まで上り詰めたという噂から、無能力者^{レベル0}にとっては憧れだ。

「どんな能力なのかは、分かりませんか？ 初春」

「ただ触れないってだけですわね。体内にテレポートしても効かないかもしれません」

「攻撃は無意味……ということですよ」

先のスキルアウトによる、女生徒を狙った事件。

取捨選択に白井黒子が気を取られているうちに、スキルアウト達は意識を取り戻し、逃走。

結果、女生徒から事情を聞くことになったのだが、女生徒は途中で意識を失った為に、記憶が曖昧だった。

その為、白井黒子は取捨選択から話を聞くことと試みたのだが……情報が無く、失敗。

最終的に行き着いた先が、初春飾利に頼みこんでの情報収集だった。

「ただ、取捨選択という異名からすると、彼は何に触れないか選ぶことが出来るのでしょうかね」

「触られないことを選ぶ……一般的な能力では、有り得ないですよ」

ね

そう。異名の意味を読むことで、彼の能力は大まかながら分かる。それでも、対抗手段を発見できる、という訳ではない。

物理的な現象を起こす能力者の内、9割は彼と相性が悪い。残りの1割でさえも、勝つ目はあるだろうが、相性が良い訳でもない。

「せめて、その取捨選択さんが良く居る学区は、分かりませんか？」

「んー、結構あちらこちらに出没してるようですからね。……目撃例も、他の都市伝説と比べると多いですし」

多すぎるが故に、その中の重要な一つには辿り着けない。それこそが、取捨選択の狙いである。

そして、その一つを突き止めようとするれば、彼の感知網に引っ掛かる。

彼の組んだプログラムは、やたらと高性能だ。

それこそ、まともな作り方をしていないのもあって。

「しょうがないですの。自分の足で探しますわ」

「まあ、テレポート空間転移能力者である白井さんなら、普通の人よりは早いでしょうね」

「それでも、人工衛星から見下ろすよりは遅いでしょっね」

とある風紀委員の能力考察（後書き）

ぶっちゃけ能力なんてバレバレなんだろうが、明言はしないぞ？
感想で突っ込まれてもスルーするぞ？

とある超能力者の超電磁砲（前書き）

……うーん。

個人的には満足出来ない。出来てない。

でもこれ以上何かを変えようとしても、どこを変えれば良くなるのか分からない。

とある超能力者の超電磁砲

今日もゆらりゆらりと、彼は町を歩いている。

特に何か目的がある訳ではなく、ただ暇つぶしに。

「ちょっと！ そのアンタ！」

だから、そんな声が聞こえても彼は気にしない。
ゆらりゆらりと歩いて、

「ちょっと！ 待ち……！」

肩の辺りで空気が動いたのを感じ、彼は振り向いた。

そこには、常盤台の生徒らしき少女がいた。

茶髪のショートヘア。超能力者《レベル5》の中では、一番顔が有名なその少女。

「ふむ。超電磁砲か。珍しい」

「そういうアンタは、接触不能……いや、取捨選択ね」

超電磁砲^{レールガン} 御坂美琴は、彼から目を離さないまま、片手で携帯を操作した。

その様子を見た取捨選択は、ゆったりとした手つきでポケットに手をつ込んだ。

その瞬間、辺りの電磁波が全て、目茶苦茶にかき乱された。

「これは、ジャミング!? アンタ、ポケットの中の物を」

「風紀委員と同室らしいな、超電磁砲。連絡は邪魔させてもらう」

ギリ、と御坂美琴の歯が音を立てた。

ジャミングを能力によって解除しようとして、即座に失敗に終わったからだ。

携帯電話の周波数帯をピンポイントで押さえたジャミング波。

能力によって、その逆位相の波をぶつければ、解除出来る。

ただし、理論上はだ。

取捨選択の変態染みたプログラミングによって、その装置は常にパターンを変える。

0.1秒前と逆の波をぶつけようとしても、既に波の形は変わっているのだ。

それこそ、機械でもこれを無効化するのは難しい。

「それでは、私はこれで失礼させていただきます。特に予定は無いが」

「ちょっと待ちなさいよ!」

当然のごとく、取捨選択は待ちはない。

だが、ふと何かに気付いた様子で正面を向き、次の瞬間には体を宙に舞わせていた。

その次の瞬間、彼が一瞬前まで居た空間に、雷撃の槍が突き刺さった。

彼が難なく元の位置に着地したするのを見ながら、御坂美琴は笑っていた。

「避けたわね？」

「……………」

取捨選択は答えない。

ただ観察するかのように、御坂美琴を見ているだけ。

「アンタが電流も透過できるなら、今の攻撃は避ける必要は無かった。でも、アンタは避けた。それは何故か。

電流が流れる時、それとは逆の方向に電子が流れることくらい、学園都市の学生なら知ってるわよね。

つまり、アンタは自分の体から電子が流れ出ることを防げないのね？」

「……………ふむ。そうだとしたら？」

「私はアンタを倒せる。相性はバツグンじゃない。ちょっと風紀委

員の本部まで来てもらっわよ!」

「ふむ。何を勘違いしているのか知らないが……超電磁砲。お前が私と相性が良い訳ではない。単に、お前の能力は私に対して相性が悪くないだけだ」

別に、何のことはない。

彼と能力におんぶでだっこなそこの能力者を一緒にしてもらっては困る。

彼は超能力者《レベル5》の中では、一番体を鍛えているのだ。

雷撃の槍の連射。

それをかいくぐるように、取捨選択は身を屈め、超電磁砲に突進した。

今もほんの数cm横を槍が通り過ぎていくが、彼は視線さえ向けない。

ただひたすら、前に。

「ちっ、当たったら大怪我するわよっ!」

「超能力者《レベル5》の攻撃で、その程度で済めば御の字だろう」

ついに、超電磁砲が槍の照準を目一杯下げた。

避けるには、跳ぶしかないという状況で、取捨選択は空中を踏みし

めた。

「はあっ！？ 空気でも踏みつけてんの！？」

「空気なら、無能力者でも毎日踏んでいる。靴の裏から逃げていくだろうがな」

そして、とうとう彼は跳び、着地した。

空中に、しかも逆さまに。

再び跳躍。超電磁砲目掛けて真っ逆さまに、彼は落ちていく。

「当たりにくるとはね！」

油断していたとしか言えないだろう。

超電磁砲が、人が一人気絶するには十分な いつもと比べれば貧

弱すぎる 電撃を放った時には、彼は空中を再度跳躍した。

今度は横に。

「な、あっしまった！？」

空中では体勢は変えられない。移動なんてもつてのほか。

一瞬前には空中を踏みつけるような非常識を見ながらも、そんな常識が超電磁砲の頭からは離れなかった。

超電磁砲の視界の端には、もう一度の跳躍の姿勢を見せた取捨選択

後始末を終え、取捨選択は心底面倒くさそうに顔を持ち上げた。
大量の野次馬が、遠巻きに彼と少女を現在進行形で見つめている。

「ふむ。どうやら目立ちすぎたか」

取捨選択は、ぼやきながらも歩き出した。
まるでモーゼのように野次馬を退けながらも、それを彼が気にすることはない。

「そのあなた、お待ちなさい！ 風紀委員ですの！」
ジャッジメント

刹那の間に、その場にもう一人の少女が現れていた。

誰かが、空間移動能力者だ、と呟く。
テレポーター

茶髪をツインテールに纏めているその少女。
ジャッジメント

風紀委員の白井黒子だ。

だが、彼はその声を聞いていなかったかのように、歩みを止めない。
後ろを一顧だにしないその姿に、白井黒子が青筋を立てる。

彼女は、スカートの中、太股に巻いてある革のベルトから、金属矢を発射した。

テレポーター
空間移動。白井黒子のそれは、触れてさえいれば三次元的な空間を無視して、物体を離れた場所に飛ばすことが出来る。

その能力を使用すれば、空間移動した物体は移動先の空間に割り込むように出現する為、単純な防御は不可能となる。

だがしかし、取捨選択をそれで倒せるか？ と問いかけられれば、

白井黒子は答えることが出来ない。

故に、金属矢は彼の靴を縫い止めた。

周りから、ヒツ、と短い悲鳴が上がった。

どう見ても、その金属矢は彼の足を貫通していたからだ。

「話を少し聞かないだけで武力行使……ふむ。なるほど。それが風紀委員のやり方か？」

「あなたには、暴行の容疑がかかっています。被害者も記憶が曖昧ですから、あなた自身が証言していただけると助かります」

ふむ、と取捨選択は考える。

傷害ではなく暴行、ということ、女性に対するそういう行為か。

ならば、自身は潔白だ、と結論を出したところで、それを目の前の少女に納得させるのにどれだけの時間がかかるのかといえば……

加害者の言い分を100%聞くような組織は、治安維持なんて出来ないだろう。

よって、まず間違いなく時間単位で拘束される。

「そちらの言い分を聞いて、私が素直に従うと？」

「聞かないでしょうね。容疑と言っても被害者からの届出もありませんし、どちらかと言えばあなたは守った方なのでしょ？」

「……ふむ。結論がそちらで出ているのなら、私は行かせてもらおう」

彼はおもむろに靴に刺さった金属矢を掴み、引っこ抜いた。
当然のように、金属矢には血の跡は無く、靴から覗く肌の色も赤に
染まった様子は無い。

ゆらりゆらりと、彼はその場を後にする。

目指すはただ一店。靴屋だ。

とある取捨選択の一日休日（前書き）

今回はいつもと比べると、大分質が落ちてると思いますが、書いた本人が思うんだから、相当ひどいんじゃないかと。

とある取捨選択の一日休日

その日は、取捨選択にとって非常に珍しい日だった。

自身にちよつかいを出そうとする人間を、粗方掃除してしまったのである。

恐らく軽く調べている段階の人間は居るだろうが、そんなものは無視してしまつてよい。

つまり、その日は取捨選択にとっての休日だった。

家でだらりだらりと怠けていた取捨選択だったが、そこにきたのが雀の一言。

『うつとうしいですよ、と』

丸つきり休日のお父さんとお母さんの構図だった為か、取捨選択は逆らえないままに外出を決めた。

といつても、彼に何かすることがある訳でもなく、いつも通りに彼はゆらりゆらりと歩いていく。

歩き歩いてお昼時。

取捨選択は目についたレストランに入った。

注文するのはハヤシライス。何故だか知らないが、彼の好物らしい。ハヤシライスが運ばれてくるまでの暇な時間に、ふと彼は外を見た。路地の奥で数人の男が、一人の少女を囲んでいる。

どう見ても自業自得だ。死ななければ御の字だろう、と彼はあっさり男達を見捨てる。

その代わりに、ウェイトレスが運んできたハヤシライスに手をつけた。

ほんの少し離れた席で、見たことのある男が店員に呼びとめられな

がらも、外に走っていくが、それは彼の知ったことではない。もちろん、その男が彼の見捨てた男達を助けにいったとしても。

そう、ほんの数秒後にその路地から稲光が飛び出して来ようが、彼の知ったことではないのだ。

彼は非常に暇だった。

やる事が無いから、いくつもの学区を跨いで歩き続けた。

ゆらりゆらりといつも通りの、平常運行。

しかし、それでもやはりやることは無い。

空は既に青から黒に塗り替えられ、明かりが灯されていようと。

さてそろそろ家に帰ろうか、と彼が考え出した時のことだった。

「あれ、そこに居るのは超第三位じゃありませんか。超奇遇ですね」

不意に彼の横合いから、声がかかる。

彼は首だけでそちらを見て、溜め息を吐いた。

「全く以って運が無い。……ふむ。私の休日もこれで終わりか」

「結局、アンタの失礼は直らないって訳？」

アイテム四人娘のうち、二人がそこに居た。

二人共かよわい女の子に見えるが、侮るなかれ。彼女達は学園都市の暗部なのだから。

……といつても、今は二人とも買い物袋を持っている為に、買出しに行つて来た女子学生にしか見えないが。

「ふむ。言い過ぎとも思えんがな」

「そんな調子だから、超友達居ないんですよ」

先ほどから『超』と繰り返す少女、絹旗はくすくすと笑った。反面、その絹旗に連れ添うようにしている金髪の少女、フレンドは呆れ顔だ。

「ホント、麦野が居なくて良かったって訳よ……」

「毎回超突っかかりますからね。宥める側としては、超迷惑です」

「ふむ。ならば、好きなだけやらせておけば良いだろう。どうせ効かないのだからな」

（それが更なる暴走を呼ぶことは超考えてないんでしょうね……はあ）

絹旗とフレンドが二人揃つて溜め息を吐き、取捨選択は首を傾げた。そもそも、取捨選択に効かないとはいえ、周りには被害が及ぶのだから、二人は止めざるをえない。

上司からの小言はもう十分だと、フレンドも絹旗も内心はうんざりといった気分だ。

ちらりと絹旗が腕に目をやり、驚愕する。
フレンドも釣られるように絹旗の腕に目をやり、その表情がピシリと固まる。

「げ、もうこんな時間って訳よ」

「これ以上遅くなると、麦野が超キレるかもしれません。さよならですね、第三位」

「ふむ。生きていたら、また会おう」

超縁起でもないです、と呟いて絹旗は歩き出した。
フレンドも呆れ顔のまま、絹旗の後に続く。

彼も二人の後ろ姿をぼんやりと眺めていたが、ふと、何かに気付いたように振り向いた。
その彼の体をすり抜けて、彼の背後に白い羽が突き刺さる。

「ちっ、不意打つても駄目か。三位つてのが信じられねえぜ」

「ふむ。今日は厄日か。早く帰りたいものだが」

「ちょっと運動に付き合っぐぐらい、いいんじゃないかねえか？」

そこに居たのは、ホスト風の男。

超能力者第二位、垣根提督。

「私にとっては、運動にすらならん」

「……はっ、戦う気ねえのに、挑発してんじゃねえよ」

イラついたような口調とは裏腹に、垣根提督は冷静だった。

何をやっても命中すらない相手に、モチベーションを保ち続けるのは難しい。

垣根提督も、分かってはいるのだ。取捨選択には勝つことは出来ない。

仮に、負けないことは出来たとしても。

「今日はどうした？ この時間におまえを見つけたのは、初めてだぜ」

「言うは易しだが……ふむ。言い方は一つしかないか。『雀に追い出された』」

「……おまえ、割とあのメイドに弱いよな」

「ふむ。言われてみれば」

ぼんやりとして、隙だらけの取捨選択。

しかし、垣根提督がその隙を狙うようなことは無い。

もちろん、その隙を狙った者から守ることも無い。

ガン！ と地面のコンクリートが弾け跳んだ。
弾痕やその他諸々の要素を加味して、取捨選択は射手の居場所を導き出す。

「ふむ。見落とし……というより、チェック漏れがあったか」

そこは一キロ近く離れたビルの屋上。

全力疾走で駆け抜けたとしても、普通なら二分以上は確実にかかる。それも、直線の最短距離を行った場合だ。道が入り組んだりしていれば、更にかかるだろう。

だが、それがどうした。

ここに居るのは、条理を覆す超能力者。その最高峰。ならば、大抵のことは道理を捻じ曲げ、解決せしめるだろう。

「そつだ、こんな言葉があったな」

ギリギリと、取捨選択の右拳が腰に構えられた。それはさながら、弓に番えられる矢のように。

そして、取捨選択は跳び上がる。空中を蹴り、一直線に射手の元へ。射手は泡を食ったように逃げ出す準備を始めているが、慌てているせいか銃を仕舞うのが遅い。

もちろん、そんな隙を取捨選択が見逃す訳も無い。

しかし、見逃そうと見逃さまいと、彼我の距離は未だに八百メートル以上。

普通ならば、到底拳が届く距離ではなかった。

「ふむ。覚悟が無い半端者か。『撃って良いのは、撃たれる覚悟がある奴だけだ』」

その瞬間、取捨選択は真つ直ぐに腕を突き出した。

その腕は中空で消え 同じように、射手の二十センチ手前の中空から飛び出した。

拳は正確無比に射手を捕らえ、気絶させる。それを確認して、彼はようやく一息ついた。

といつても、彼は足を止めない。

一応自分から情報を流しているとはいえ、自身の能力の核心を知る者は少ないのだから。

わざわざその人数を増やすことはない。きつちりと、後始末はしなければ。

「……ふむ。そういえば、第二位は見えていたのかな？」

ぐりんと首だけを回して、取捨選択は後ろを見やる。

だがそこに第二位、垣根提督の姿は無く。

「……見られていたか。ふむ。面倒なことになりそうだ」

かといつて、彼が慌てることは無い。

能力の全貌を知ろうが知らまいが、彼に垣根提督が勝つ確立はほぼ

ゼロ。

取捨選択にとって、垣根提督とは無駄にプライドが高いだけの人間なのだから。

だから、第二位が何かをした程度で、慌てることは有り得ない。

「おかえりなさいまし、と」

帰ってきた取捨選択を前にしても、雀は冷静だった。

たとえ、服が血で汚れていたとしても。

「携帯を忘れていたせいで、後片付けに余計な手間がかかった……」

「はいはい。どうでもいいので、その服をさっさと洗濯機に入れて下さい、と」

血の理由を説明しだした取捨選択に対して、雀の対応は随分と淡泊だ。

なんていうか、ドブに落ちた亭主の面倒を毎回見ている妻のような。

「そつえば、SGEから製作依頼が来ていましたよ」

「ふむ。後で見てください。それより先に、夕飯を……」

「冷凍のギョウザがありますから、チンするのを待って下さいね、と」

「ふむ。ちなみに製造場所は？」

その問いに、雀は満面の笑顔で答えた。

「チャイナですよ、と！」

「ふむ。なら廃棄して、他の物を作らねばな」

取捨選択はあくまで冷静に、ギョウザを袋ごとゴミ箱にポツシュートしようとして、止めた。

胡乱な目付きで裏側を眺め、雀の顔に投げつける。

ここに、雇用主と雇用者の熾烈な戦いが始まったのだった……

ちなみに、正しい製造場所は日本（学園都市）だった。

どうやら、彼女なりのジョークだったらしい。

とある取捨選択の一日休日（後書き）

なんだかオチてない気がするが、大丈夫か？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3940s/>

とある噂の取捨選択

2011年10月5日17時47分発行